



Title	「ケド」と「MAIS」:日仏逆接接続詞の比較 : 外国語教育への応用を目指して
Author(s)	Escoute, Jean
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49465
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	エスクート ジャン ESCOUTE JEAN
博士の専攻分野の名称	博 士（言語文化学）
学 位 記 番 号	第 2 3 2 3 2 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 21 年 3 月 24 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 言語社会研究科言語社会専攻
学 位 論 文 名	「ケド」と「MAIS」：日仏逆接接続詞の比較－外国語教育への応用を目指して－
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 木内 良行 (副査) 教 授 仁田 義雄 教 授 鈴木 睦 准教授 筒井 佐代 准教授 堀川 智也

論 文 内 容 の 要 旨

本論文では、外国語教育における授業に对照言語学の成果を導入し、応用するために日本語の接続語ケドとフランス語のMAISを中心とした対立接続語の比較・対照を通して、両接続語の機能を明らかにすることを目的としている。

その目的を達成するための方法論としては、認知言語学、談話分析、そして社会言語学の種々の理論を主に用いることにし、それぞれ、第二、三、四章に述べる。第一章は先行研究の概観で、第五章は第二章から第四章までで得られた結果を外国語教育にどのように導入したらよいのかについて考察する。

第一章では、先行研究についてについて概観する。

第一節では、英仏対立接続語（特にBUTとMAIS）の研究において先駆者であるLakoff (1971)とAnscombe & Ducrot (1977) の研究について述べる。前者は一つの言語から言語学的テストにより接続語の二つの機能を示したのに対して、後者は三つの言語を比べることにより、二つの機能を提示した。ところが、彼達の研究で示された機能は本質的に異なっているため、(Lakoff (1971)は「逆接」と「対比」、Anscombe & Ducrot (1977)は「修正」と「非修正」) BUTとMAISには二つ以上の機能があると考えられる。また、König (1985, 1986, 1988, 1991, 1994, 2005) と Sweetser(1990) の研究もこのことを支持する結果となっている。

第二節では、BUTとMAISの先行研究における分類よりも網羅的なケドの機能分類を提案している先行研究について述べる。ここでの問題は研究者によって専門用語が異なっていることと、余りにも漠然としている定義が多いこと、そして設定された機能に関して、明示的証拠による裏付けが十分になされているとは言えないことである。

この章では、先行研究で現れる様々な問題点を見る（例えば、Lakoff (1971) や Anscombe & Ducrot (1977)の二つの機能に限られる細分的な見方、または日本の研究者の論文におけるケドの様々な機能を区別するためのテストの欠如）。ここでは、専門用語の不統一、定義の曖昧さ、機能がどこから由来するかの混乱、様々な機能の存在を証明するテスト、そして対立的な関係には

どのような種類があるかなどの問題点を取り上げる。

また、先行研究において注目に値する点についてもこの章で検討する。Lakoff (1971) の一言語内での前件と後件の入れ替えによる対称テストと Anscombe & Ducrot (1977) の三つの言語の対照によるテスト, Königの共時言語学と通時言語学の双方向的アプローチ, Sweetserの三つレベルによるアプローチと語用論的観点からの考察、そして、網羅的な記述を行っている日本の研究者の方法論などである。

第二章では、対立接続語のより体系的な分類を設定するための基礎となる概念（BUTやMAISにあっても、なくても同様）を見ていく。

第一章で明らかになった問題点を解決するために、第一節では、分類の方法論について考え、分類するための基礎を築く。Pander Maat (1998) のDCP (Discriminating Connective Principle 接続語判別の原則) に基づいたテストを用いて、同じ文で様々な接続語を入れ替えることにより対立的な用法が少なくとも8つあることを示す。そして、その8つの用法を詳述していくため、第二節では、認知レベルで対立関係と繋がる要素について述べ、ケドとMAISに限らず、何と何の要素が対立を成立させているかを検討する。

そして、第三節において、第一節で存在を認めた8つの用法を第二節で述べた要素同士の組み合わせという観点から、それぞれ分析する。

第三章では、ケドとMAISの談話の観点から見た機能を考察し、談話における対立について明らかにする。その際、文中・文と文の間・文よりも上位という三つのレベルに分けて談話を分析する。この対立は、それぞれのレベルによって形態が異なってくる。

そのため、まず第一節では、「転位」と「フラグメント」の先行研究に基づいて、文中におけるケドとMAISの談話機能を分析する。転位の概念は、(1) 文中、(2) 二人の話し手の間でのやり取りの文、(3) 談話レベルでの主題への回帰（主題が放棄されたり、変更されたりした後に、再度元のテーマに戻る）のそれぞれにおける統語的不連続性を意味する。その後、この三つの概念の一つずつ見ていくにあたり、これらの不連続性を呈する節を指す用語として、「フラグメント」という用語を一般的に用いる。「フラグメント」とは、談話の流れにおける「亀裂」の概念を明確に示す用語であり、次のような形で用いられる。まず、付帯的フラグメントという、文中にあるべきはずの位置に存在しない節、あるいは文中に現れる他の一つまたは複数の節と同じ談話レベルに存在しない節に関して、考察する。

そして第二節では、連帯的フラグメントについて述べる。これは、二つの節が隣接することで談話の連続性を保っているのだが、それぞれの節を発話したのが同一の話し手ではないものであり、これに関連しては、ターンとターン・テーキングの概念も検討していく。ターン・テーキングの理論に基づいて、会話参加者間の相互作用の中で、連帯的フラグメントによる会話の参加者間のターン交替の際、どのような時に、何のため、ケドとMAISが用いられるのかを見る。

接続語のケドと発話のターンの関係について、事例を基に検討する。談話参加者が発言したい時や発言してもらいたい時、また、そのまま発言を続ける時には、様々な方法が用いられる。これは、具体的には、発言のターンを取りたい時、受ける時、相手の話を遮る時、相手にターンを渡したい時、ただ自分のターンを終えたい時、そのまま自分のターンで保持したい時に分けられる。これらは言い換えると、turn-requesting (TR)(ターン要求)、turn-acceptance (TA)(ターン承諾)、turn-intercepting (TI)(ターン横取り)、turn-yielding (TY)(ターン譲渡)、turn-finishing (TF)(ターン完遂)、turn-maintaining (TM)(ターン保持)、turn-reacquisition (TRa) (ターン再取得)という7つ場合に該当し、ケドはそのいずれにおいても用いられる。

最後に、非連帯フラグメントという、二つの節は連続していないが、議論の流れを考慮すると連続すべきはずの節を見ていく。ここにおいて接続語の届く範囲についても考えてみる。

第四章では、ケドとMAISの社会言語学の観点から見た機能を考察する。

第一節では、ケドの社会言語学的な機能を観察する。先行研究や文脈・テスト分析に基づき、これら三つの用語の関係とその定義を明確にする。そして、その「丁寧さ」、「曖昧さ」、「緩和」を示すケドは、次の二種類に分けることができる。「前置き」の節の文中に現れるケド（文が未完の場合もあるため、文末のケドと混同しないよう留意）と文末に現れるケドである。

社会言語学的観点から見たケドの機能という点、「曖昧さ」「緩和」そして「丁寧さ」という三つのキーワードが先行研究でよく現れるが、その関係について詳しく述べられていないので、筆者がより詳細に観察する。

そして、文中（前置き節に現れるケド）と文末で現れるケドの社会言語学的な機能について述べる。

「前置き」のタイプの節からケドまたはMAISを削除すると、この二つの接続語が非常に異なる役割を担っていることが分かる。統語レベルにおいて、社会言語学的観点から見たケドは文末に非常に頻繁に現れ、文の調子を和らげる機能を果たす。これに対し、同じ視点から見たMAISの用法は、逆に文頭に現れ、文の調子を強める働きをする。

文末で現れるケドの社会言語学的な用法は少なくとも二つあると考えられる。緩和的で、学習者に対して一番分かりやすい用法と、曖昧で、FTAになる用法。普段、学習者の中でも、研究者の中でもこの二つの用法が厳密に区別されていないという現実がある。

第二節では、MAISの社会言語学機能を観察する。社会言語学の観点からケドにはないMAISの機能にどのようなものがあるかを見る。MAISは、聞き手の発言から導きだされる言語（外）要素と、それに対する話し手の受け取り方の間の対立、あるいは聞き手が進めようとする会話の展開に対して話し手が不満を抱いている場合に、その会話の展開と話し手の不満との間の対立を示すときに用いられる。さらに、MAISは、行為（話し手の行為か、聞き手の行為かを問わない）や状況について話し手が期待する事柄と、実際に起こった事柄との間の対立を示すときにも使われる。さらに、MAISは、単に、驚きや不満、もしくは逆に、満足を表すこともある。

第五章では、これまでの章で発見したケドとMAISの様々な用法に関して、第一節では学習者のレベルを提示するCEFR (Common European Framework of Reference for Languages ユーロパ共通参照枠) と習得の難易度を計るために外国語教育に影響を与える言語転移を基に作られたPrator (1967)の「hierarchy of difficulty (難易度の階層)」という概念に基づいて、どのように授業に導入できるのかという問題に取り組む。本研究はフランス人への日本語教育と日本人へのフランス語教育の双方に有益なものと思われるが、本稿では特に日本人へのフランス語教育について考察する。日本人学習者にとって習得しやすい、やや困難、非常に困難なMAISの機能の分類を試案する。

第二節では、外国語教育に対照言語学を組み入れることについて述べる。ここでは、具体的に教授法の例を示し、どのようなインプットをすればよいか、あるいはどのような練習問題を授業に組み込めばいいかについて提案する。

論文審査の結果の要旨

本論文は、日本語で接続詞、あるいは接続助詞として扱われる「ケド」を中心に、日本語の逆接表現についてその用法を詳述し、フランス語の接続詞 mais との比較を通して、その構文的、語用論的意味をより明らかにすることによって、その結果をもとに語学教育への応用を試みたものである。日本語の逆接の接続詞には、「が」、「のに」などをはじめとして多数存在するが、

いずれも逆接の意味を持つとはいえ、すべてが同じコンテキストで同様な用法を持つ訳ではない。それぞれの接続詞ごとに対立する対象の捉え方が同じではなく、また一見「逆接」の意味から離れた、話題提示や前置きの用法も存在する。それらの接続詞についての研究は既に多数ありはするが、逆接接続詞の意味用法の多様性と「逆接」という概念自体の定義の困難さもあり断片的な記述が多い。その中で、本論文は逆接表現全体の中で、特定の接続詞をより大きな視点から相対的に位置づけようとする試みであり、まずその点において評価できるものである。「逆接」とは何かということから出発し、前件と後件の論理的な意味関係についての考察にとどまらず、推論の仕方、丁寧さ、会話におけるつなぎの役割など語用論的立場からの多角的な記述や考察がなされている。扱われている問題が多岐にわたっているため、議論が十分に尽くされていないところや、さらに多くのデータを分析する必要がある部分も少なくないが、興味深い観察も多数含まれている。とくに、会話の中での働きに注目し、それをターンの観点から明らかにしようとした点が、先行研究には見られない新しい試みである。特に、文末の「ケド」の働きについて、「ターンの渡し方」に関わる形式として捉えた点は新たな着眼点であり、日本語教育への応用の可能性もある。また「ケド」が話し言葉の中で果たす役割の指導についての考察は興味深い。最後の章では、フランス語の *mais* に関して、日本人学習者のための教授法における様々な提案がなされているが、第二言語習得研究において、学習者の母語と目標言語との対照研究が相対的に重要視されなくなる傾向の中で、あえて対照言語学の研究結果を言語教育へ応用しようという姿勢を貫いたことにより、対照研究の重要性をあらためて示すことができたという点で、日本語教育学の分野においても有益な示唆となっている。以上のことより、審査委員全員は本論文を博士の学位論文に値すると判断した。